第 15 回　日本生殖心理学会　学術集会

P-15

東京,2018.02.24-25

臨床催眠療法が不妊治療を受ける患者にどのように寄与できるか？
　　　　　～多職種協働でのこころのケア構築のプロセス～

田中久美子１）　横山顕子２）杉本朱実１）　森本義晴１）

所属：1) HORAC グランフロント大阪クリニック　2) よこやまクリニック

【目的】
不妊治療中の患者のこころは、不妊原因や治療方法についての自己決定やそのための情報の収集から始まり、治療中も治療後も絶えず不安や葛藤などストレスに晒されている。今回は、治療中のストレスケアに効果があるという催眠療法を実施し、効果を検討した。

【方法】2017 年 5 月～7 月、多職種協働のもと、女性の患者 6 人に対して集団臨床催眠療法を実施した。構造は隔週 1 回で 1 回 90 分で集団で実施した。臨床催眠療法の開始前と第 5 回目終了時に血液検査（NK 活性、酸化ストレス値 d-ROMs、抗酸化力 BAP、酸化ストレス度、潜在的酸化能）と心理検査（STAI、QOL 尺度）を行った（心理検査の結果については別担当者が報告)。

【結果と考察】
血液検査結果は以下の通りだった。NK 活性については平均値:38.67%→35.3%、酸化ストレス値 d-ROMs については平均値:前 351.33→後 341.17、抗酸化力 BAP については平均値:前 2149.83→後 2321.00、酸化ストレス度については平均値 1.46→1.32、潜在的抗酸化能は平均値 6.51→7.04 だった。
保坂ら(2002)の先行研究があり、不妊治療患者への催眠療法の有効性、Levitas ら（2006）の研究でも、胚移植患者に対する催眠療法の有効性が報告されている。今回の結果も同様で臨床催眠は患者へのこころのケアに繋がっていると血液検査からも読み取ることができる。そこには、医師や看護師、事務、栄養士、鍼灸師、遺伝カウンセラーなどの多職種との協働が不可欠であり、集団臨床催眠療法の実施には 2 年の期間を要した。
臨床催眠療法、また多職種協働でのこころケアを構築していくプロセスは、患者のもつ本来の自然治癒力を引き出すことに寄与したと考えられる。
今後は症例を増やし、さらなる検討を重ねていきたい。